

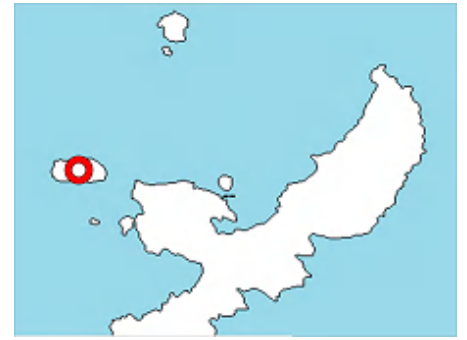
与那城彦興さん

1930(昭和5)年生まれ

民間人

所属 伊江国民学校高等科

戦地 伊江島



●1945(昭和20)年1月26日ごろ、大きな空襲があった。

その時に米軍機が学校のそばに一トン爆弾を落とし、大きな穴ができた。その穴を見ている時に米軍機がやって来たので、城山のそばの野砲陣地に逃げ込んだ。米軍機は逃げて行くのを見たのかわからないが、逃げこんだ野砲陣地に爆弾を落とした。爆弾は野砲陣地に直撃し8名が亡くなった。しかし自分は助かった。

15・6歳でわんぱくで空襲は怖くなかった。遊びと同じ。

●1945(昭和20)年4月16日 伊江島に米軍上陸

この日は空襲がなく静かだった。「めずらしいもんだなあ。こんな日もあるんだなあ。」と思っていたら、米軍が上陸してきた。家の近所にあった機関銃陣地はすぐにやられてしまった。

米軍が上陸してからは、城山の近くにあった壕の中に潜んでいた。

民間の壕より安全だと、兵隊と一緒に壕や陣地に入っていく人もいたが、みんな死んでしまった。

何日目か米軍の総攻撃があり、日本軍が全滅。この時、壕の中で外の音が聞こえたがすごかった。あちこちから弾がビュンビュン飛んでいく。

壕には1週間くらい家族と近所の人と一緒にいて、その後、城山の近くにある壕から湧出(ワジー:水源地)に逃げて、北部海岸沿いにあるイッテヤーヤガマに入る。このガマに1ヶ月くらいいた。

壕に入っていた時に、艦砲でやられた人がいた。「水がほしい」と言っていたが、飲ませたら死ぬので飲まなかった。しかしかわいそうだったので父が水をあげると、すぐその場で息を引き取った。

保管米といって緊急時用に保存して来た米があり、それをいくらでもとってこれたが、火をたくと敵に見つかるので炊くことができず生米を食べていた。子供だったので生米では食べたうちに入らなかった。

日本兵が馬を射殺してその肉をくれた。

当時は帽子もなく、半ズボンに学生服。さらに裸足。ガマは地面が固くて寝ると痛い。

そのうちイッテヤーヤガマにも日本兵が入ってきて、とうとう米軍も入ってきた。

朝8時か9時ごろ、米軍は壕にやってきて手榴弾や催涙弾をなげ込む。壕は大きいので奥の方に隠れていたが、催涙弾をなげ込まれると息ができない。ポロきれに小便をして、ガスが鼻に入らないように顔を隠した。手榴弾は頭のあたりで破裂した。午後3、4時ごろになっても米軍はずっと壕を攻撃していた。

壕には穴が三つか四つあいていて、父と兄ともう1人がそのうちの一つから逃げて米軍に捕まった。

捕虜は米軍に集められて住民に投降を呼びかけて回っていた。

●1945(昭和20)年5月ごろ 捕虜になる

昼は壕に隠れて、夜は食糧・水探し。水がなかった。海岸沿いに出て水のたまった所を探し、塩が混じりボウフラの湧いた水を飲んでた。おいしい水が飲めたら死んでもいいという感じ。

ある時、壕の外から「出てこい出てこい」と呼ぶので、「米軍ではないかなあ」と思いながらビクビクして壕から出て、捕虜になる。1か月以上飲まず食わずで、投降する時はフラフラだった。

●1945(昭和20)年5月末ごろ 伊江島の住人は慶良間列島の渡嘉敷島に連れて行かれる

渡嘉敷ではまだ日米の戦闘が続いていた。なぜ米軍が伊江島の人をそんな所につれていったのかわからない。

今考えると餌食にでもされたのかと思う。食糧もなかった。

終戦の時は、米軍の陣地で黒人の兵隊と一緒に隊長の当番をしていた。黒人兵が呼ぶので行ってみると、「日本とアメリカが仲直りした」と言う。これはいいなあと思っていた。そして玉音放送を聞いた。なにを言っているのかわからなかったが、これで戦闘が終わったのかなあと思った。

翌日、日本側から3名、アメリカ側から何名かきて、停戦の交渉を行った。さらにその翌日、白旗を持った日本兵が山からゾロゾロ降りてきた。そして米軍に武装解除された。この時に「負けたんだ」と思った。

その後は山とあった弾薬を、海上トラックを使って海中投棄した。戦争が終わると渡嘉敷から米軍が引き揚げ、投降して来た渡嘉敷の人に加わったので食べ物にさらに困った。

●渡嘉敷島から本島の収容所へ行き、1947(昭和22)年ごろ伊江島に戻る

(取材日:2011年2月6日)